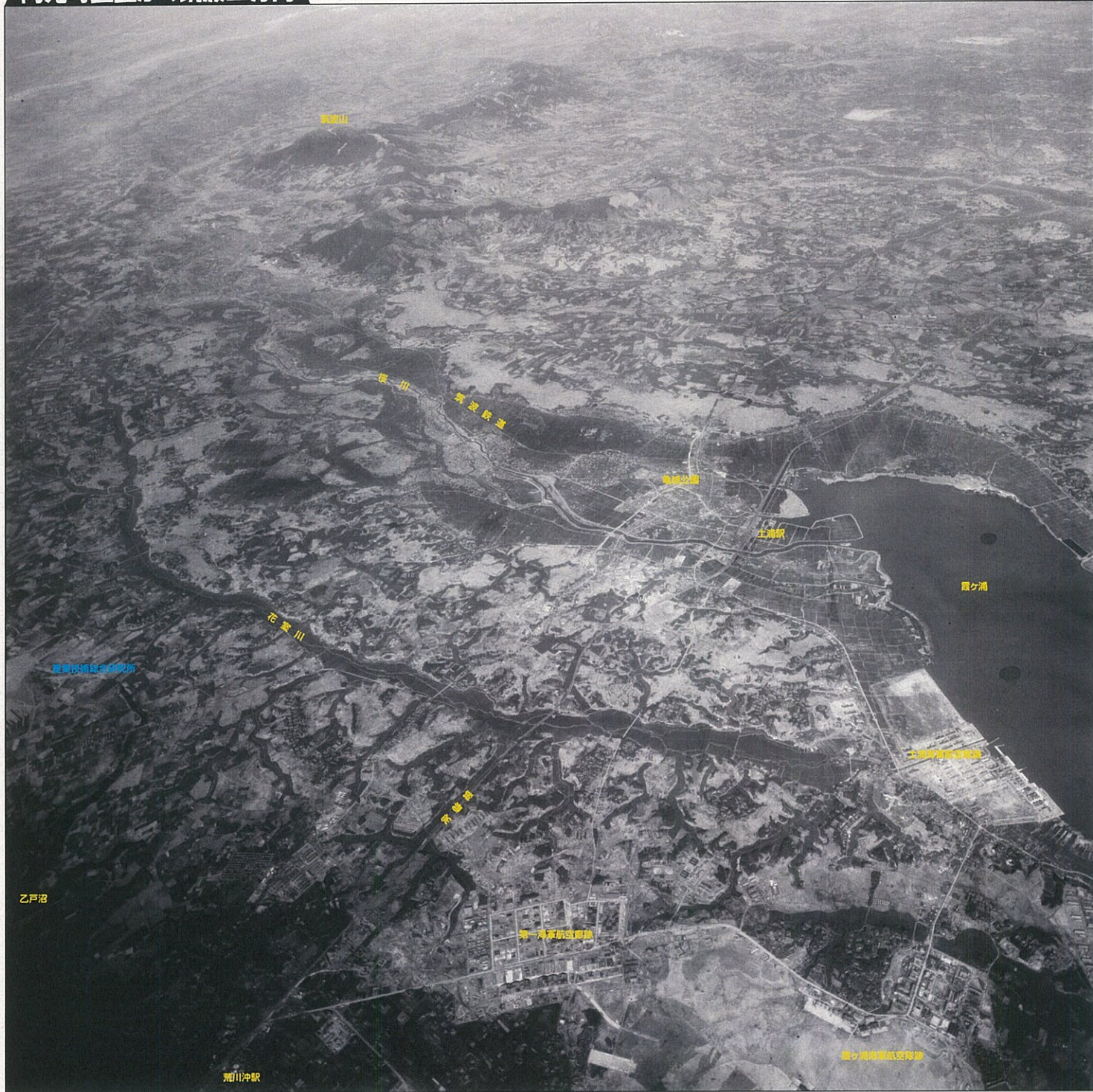


明治の面影残る筑波周辺

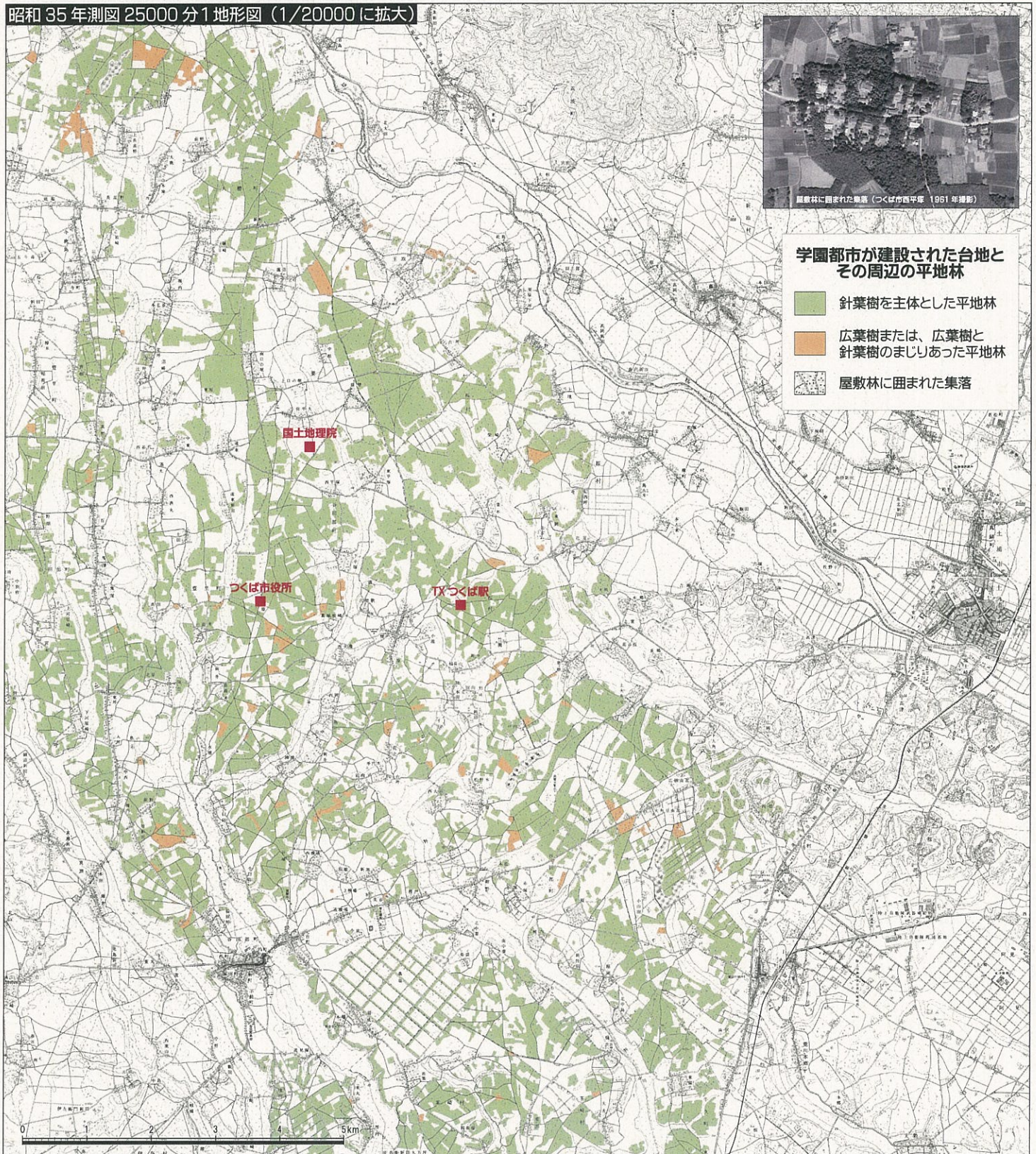
阿見町上空から筑波山方向

1946 年 米軍撮影



学園都市建設決定前の筑波

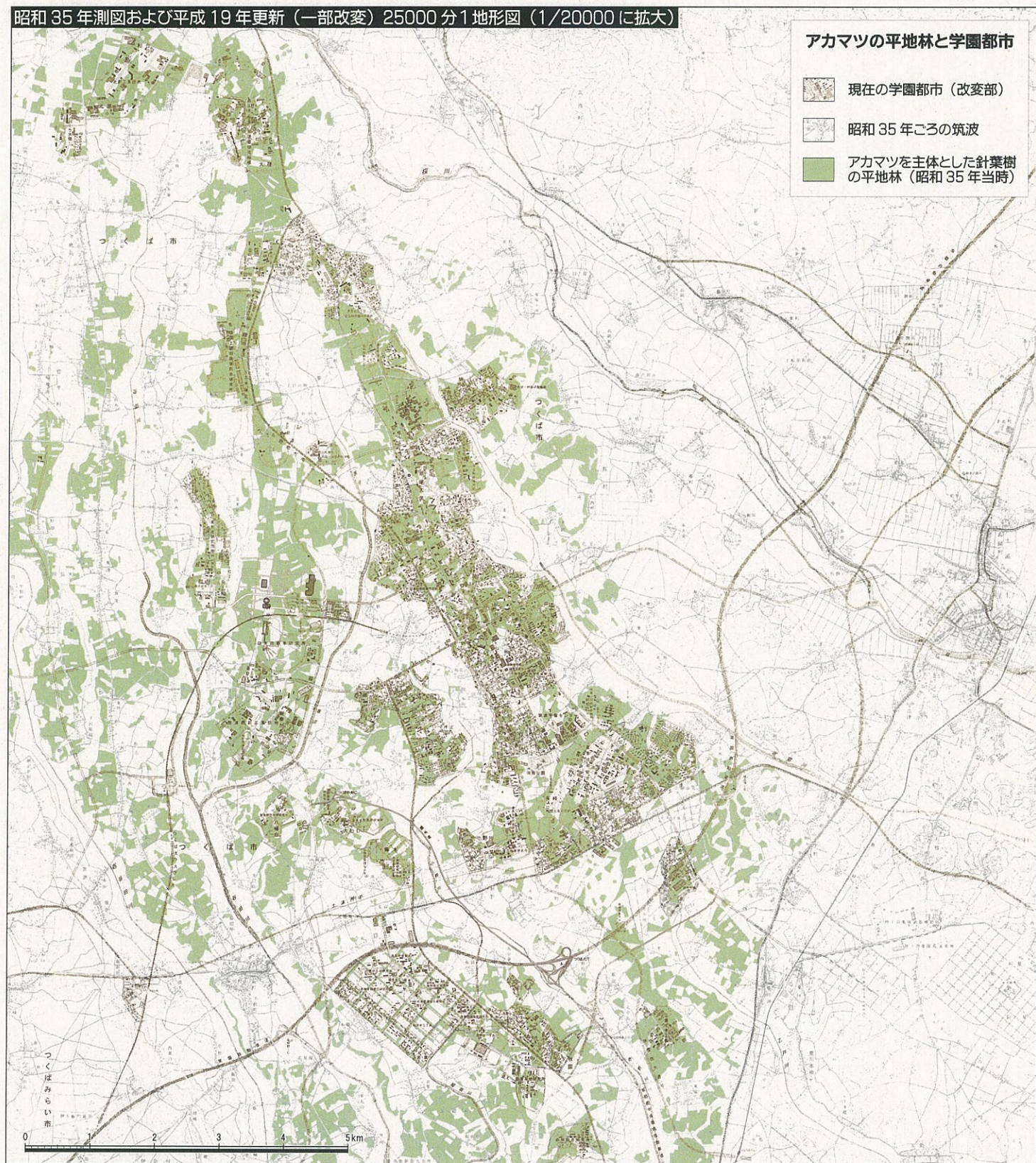
昭和 35 年測図 25000 分 1 地形図 (1/20000 に拡大)



学園都市の建設がはじまる前の筑波です。古くからこの地にある民家はその周囲をケヤキやシラカシの屋敷林で囲っています。明治時代の地図と比較すると目に付くのは、ほとんどの樹林が針葉樹に変わっているところです。明治から昭和の初めごろまでに、落葉樹や広葉樹のほとんどが伐採され、炭や薪として東京方面に大量に出荷されました。林の木がなくなると、「筑波おろし」と呼ばれる冬季の冷たい北風や、春先の激しい風が関東ローム層におおわれた台地表面の赤土を巻き上げました。戦後、ここにアカマツの苗木が植林され一帯はアカマツ林となりました。このアカマツの平地林が、学園都市の建設用地として提供されました。

アカマツの平地林と学園都市

昭和 35 年測図および平成 19 年更新（一部改変）25000 分 1 地形図（1/20000 に拡大）

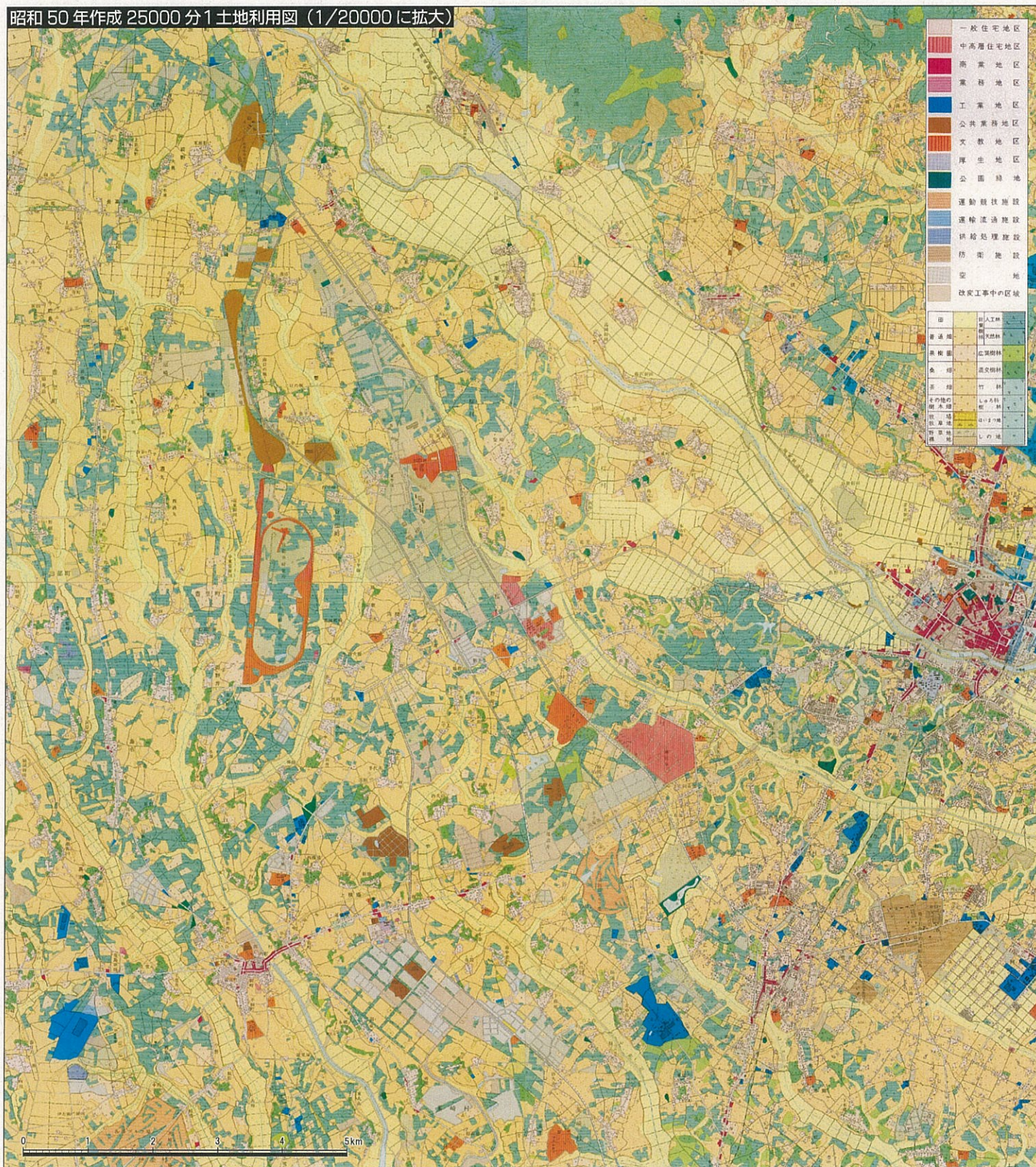


この地図は、昭和 35 年（1960 年）に作成された地形図上で針葉樹林に区分された植生を着色し、その上に現在の地形図のうち、試験研究機関や教育施設、住宅・工業団地、おもな道路・鉄道など筑波研究学園都市の建設にともない大きく変貌した部分を重ねています。ここで示した針葉樹林は、一部にスギ林などがあるものの、大部分が「アカマツの平地林」と考えられます。

この地図を見ると、ほかでも紹介しているように「アカマツの平地林を切り開いて学園都市が作られた」ということがよくわかります。

建設が本格化したころの学園

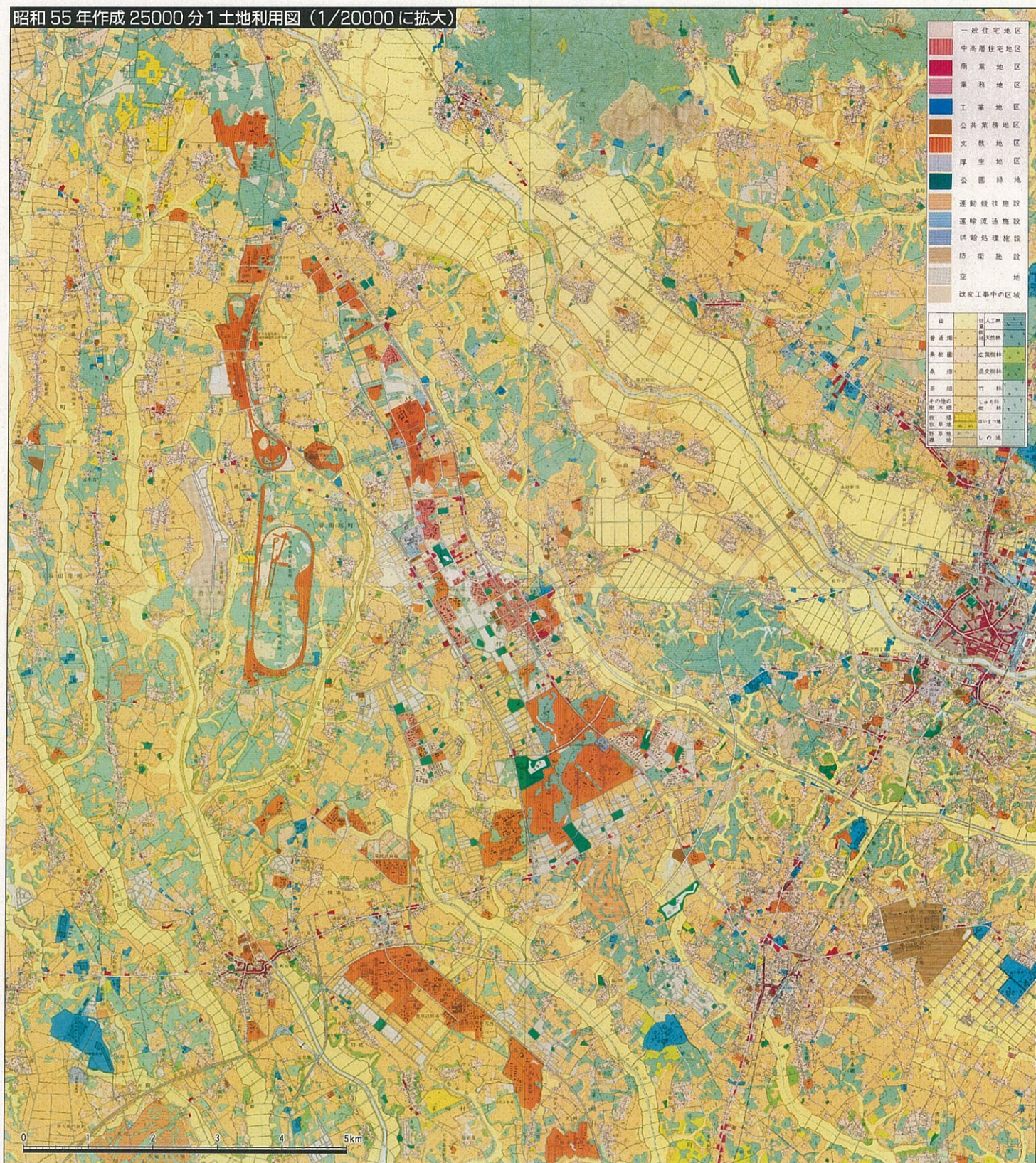
昭和 50 年作成 25000 分 1 土地利用図 (1/20000 に拡大)



この地図は、昭和 50 年に作成された 25000 分 1 土地利用図です。この地図がつけられたのは、先行する機関やそこで働く職員・家族の移転が始まり、学園都市建設が本格化したころです。学園都市中心部の概形はほぼできあがっていますが、空き地や改変工事中のところが多く、学園東大通りや牛久学園線も学園地区より南側は建設中で国道 6 号とはつながっておらず、周辺の都市とは唯一土浦とだけ幹線道路で結ばれていました。地図を見ると、学園都市の中心部付近で直線的に並行している学園東・西大通りが、中心から離れると大きな弧を描いて蛇行していたり、移転・新設機関の造成工事の敷地が点在していることがわかります。これは、農地の放棄や家屋の立ち退きをできるだけ少なくし、もともとの集落や田畑を残して都市計画されたためです。学園地区の西隣には、「日本自動車研究所」の高速試験場が表示されています。

移転が終わったころの学園

昭和 55 年作成 25000 分 1 土地利用図 (1/20000 に拡大)



この地図は、試験研究機関等の移転がほぼ終了した昭和 55 年に作成された土地利用図です。土地利用図は、土地の利用状態を都市（住宅・行政・商業・工業・流通・文教など）や農地、林地などにわけて表示しています。

この地図を見ると、5 年前の昭和 50 年の土地利用図と比較して、移転した各機関の名称が表記され、地域内に中高層の公務員住宅や文教施設が増えていることがわかります。しかし、中心部には商業施設がほとんどなく、いまは一般住宅地となっている東新井や千現・梅園あたりもこの時点では、空き地や畑が広がっています。また、常磐自動車道の谷田部IC以北は建設中となっているほか、学園西大通りは土浦野田線との交差点で止まっており、土浦学園線も蓮沼川の 500m ほど手前で途切れているなど、交通網の整備はまだ道半ばというところです。